



かたり神の夜

魚住すくも

かたり神の家に今夜も物語をねだりに娘がやってくる。

「ねー、お話」

「……人の膝に寝転がらないで下さい」

響めてかたり神は言うが、娘は甘えた素振りを見せる。

「いーじゃん、減るもんじゃなし」

「お前はいつもそうですね……さあ、どんな人生がお望みかな？」

娘は言った。

「短いのがいいわ。

だって、今は夜明けが早い」

それでは、と言ってかたり神は静かに語りはじめる。

〈森の奥深くに館があった。「物語を集めているの。世界中の、ありとあらゆる」娘は言う。継いだばかりの館主は、困ったように首をかしげた。「ここにある本は、総て街で手に入るものですよ」「いいえ、本じゃない。物語はどこにでもあるわ。そう、例えばあなたの中に」〉

〈狭い部屋にところ狭しと並んでいる本棚。見上げでも、一番上など見えない。「世界中の物語を集めたよ、きみのために」どこからともなく声がある。わたしは一冊、本棚から本を取りだした。目眩く物語がわたしを虜にする。思い出しかけた何かを忘れ続けながら、物語を読んでいく〉

〈大学合格のお祝いに貰ったのは、一冊の日記帳だった。ぱらぱらめくってみると、物語が綴られていた。ページを繰るうちに、どんどん物語の中に入っていく。ふと気付くと夜が明けていた。こんな凄い物語を書く作者に逢ってみたい。願いは確信に変わっていった〉

〈11月5日、とかけてふと、カレンダーを見る。頭の中を既視感が通り過ぎていく。なんとも言えない感覚を残して消えていった。そして、わたしは日常の物語を紡いでゆく。消えていったあれのコトは、このノートに封じ込めて〉

〈ラベンダーの薫りを漂わせて、小さな物語が電子の海から流れてきた〉

〈このアプリはあなたの代わりに #twnovel を書きます。そんな言葉に惹かれてダウンロードしてみた。アプリが紡ぐ物語とはどんなものだろう。早速、使ってみる。物語生成というボタンを押す。画面に文字がズラリと並んだところで、目が醒めた。生成した筈の物語は、虚空に消える〉

ようやく月が出てきた。

「月が出てきましたね。

.....いい加減、膝からどいて頂けませんか？ 痺れてきた」少しだけ顔をしかめてかたり神がいう。

「あー、きれーなお月様」

不機嫌そうなかたり神のことなどお構いなしに、呑気な口調で娘は言う。

「ねえ、月が出てくる話はないの？」

〈何処かで太鼓の音がする。娘は音を頼りに、暗がりの中を歩いていった。欠けはじめた月が、娘の足元を照らす。身体の芯に響く音を、感じて、娘の足ははやくなる。響いているのは、太古からのリズム〉

〈人のいなくなった街で、佇んでいた。白い月が薄暗い蒼空に、儚く浮かんでいる。彼女はどこにいるのだろうか。僕は彼女を探さなくてはならない。裂けた地面を踏みしめて、僕は歩き出した〉

〈闇色の雲から月が見え隠れしている。僕は月を追いかけてはしって行く。「この夜を飛び越えて、逢いにきてよ」彼女の声が聞こえた、月夜の公園で〉

〈濃紺の空に、黄色い月。お酒を飲みながらベランダから月を眺めていると、ふわり身体が浮かんだ。びっくりしていると、隣の部屋のあの人が「キレイな月だ。今夜は空中散歩日和ですね」という。わたしはどぎまぎしながら相槌を打つ〉

〈キミの言葉はまるで甘露のよう。言葉を集めて、あたしだけの物語を創ろう。その物語から、永遠に醒めなければいい〉

〈お姫様がねむりに就いてから、99年がたとうとしていた。その間に科学技術は進歩して、二進法の王子様が、モーニングコールで目覚めのキスを送ってくる〉

「ねえ、」

物語を話しつづけるかたり神は、娘の言葉に口をつぐんだ。

「なんです？」

「わたしのこと、愛してる？」

いきなりな問いかけに、かたり神は思わず破顔する。

「何を今更。嫌いなら、夜伽などせぬ。

……愛しているよ」

「……ウソつき。

ホントはなんて厄介な娘だって思ってる癖に」

「私は神ですからね。神は人を嫌いになどなりませんよ」

穏やかな口調で言い聞かせるかたり神に、娘はなおも言い募る。

「ウソよ。

だって、みんなはじめはそう言うんだ。愛してるって。

でも、じきに疎ましくなる」

「でも、私は嫌いになどなりませんよ」 穏やかな笑みを浮かべ、かたり神は言った。

穏やかな、本当に穏やかな笑み。娘は、何故か心の奥がザワザワするのをとめられずにいる。

〈待ち合わせ時間より、だいぶ早く図書館についてしまった。時間をつぶそうと、館内を見て回る。子どもの頃に読んでいたマンガを見つけた。懐かしさで手にとって、そのまま物語に没入していく。「なんや、こんなところにいたんか」声に顔をあげると、待ち人が呆れた顔をして立っていた〉

〈ふわふわとした不安。キミ、ちゃんと足元を見なさい。先生が声をかける。見ると、足が地面から離れていて。ぷかりぷかり浮かぶ、アタシの身体〉

〈図書室の片隅で、君はそっと僕に言ったね。「本を読んでいる時の貴方が好き」って。君はページの間から僕をじっと見つめている。君の眼差しは、時空の歪みなんか簡単にはねのけて、僕の心を狙い打ちにする〉

〈恋というヤツは恐ろしい、と池の端で占い師が呟いた。はあ、と青年は気の抜けた声を出す。占い師の老婆は、青年を一瞥して再び口を開いた。恋というヤツは、そのものの世界をかえてしまうのじゃ、お主、程なくして恋に墮ちるじゃろう。風が吹いて、甘い薫りを運んできた〉

〈「月が落ちてきた」姉さんが蒼い顔をして言った。そんなバカなと外に出てみると、本当に月がすぐ近くに浮かんでいる。街灯の明かりを受けて、不安定なまわり方で今にも落っこちそうだ〉

〈人生を半分に折ってみる。今は、全体のどの辺だろう。永遠に続くものなんかあり得ない。もう、半分は通り過ぎてしまったのだろうか〉

〈雨と記憶が降っている。足元にはぐしゃぐしゃのプリント用紙。誰かのあざわらう声。捨てゼリフ。悲惨な記憶が降っている〉

〈どこまでも続いていく、昏い道。したたと、何処かで水が落ちていく音が聞こえる。ぼくはしゃがみこんだ。こんなのは、間違っている。悪夢だ。歩いても歩いても、何処にも辿りつけないなんて〉

〈寂しさのあまり、猫を手なずけてみる。余計寂しくなってしまった〉

〈終わりの見えないメンテナンスが続いている。未来への絶望のために壊れてしまった者をたくさん見てきた。次は自分かもしれない。そんな恐れの中で展望すら見えない作業が、今も続く〉

〈世界の不幸の理由を知りたいか、とそれは聞いた。黒い黒い、形状し難い何か。嫌だ、と私は耳を塞ぎ、目を瞑る。そうやって心を閉ざしてもなお、見えてくる・聞こえてくる不幸。理由なんて知りたくない、みんな幸せになればいいのに！ そう叫んだ声で目が覚めた〉

〈抑えきれない衝動で、私はペンを手にした。乱暴な手つきでノートを開く。猛烈な勢いで、寓話を書いた。真っ赤な真っ赤な寓話を〉

「……どうしました？」

娘の様子が気になって、かたり神は話をやめた。

「さっきの話、蒸し返すけど」言葉を切り、身を起こした。

「何故、嫌いにならない自信があるの？」

娘の言葉に密やかな笑みを浮かべる。傍らで灯している蠟燭の炎がふらりと震える。

「自分のことを本当に嫌いになどなれないでしょう。」

誰でも心の奥底では、認められたい、愛されたい、許されたいと思うものです」

話すかたり神の顔の影が動いているのを見て、娘は少し恐怖を感じる。

「……何を言ってるの……」

「まだ、お気づきではないのか。」

ここには、娘よ。お前しかいないのですよ」

蠟燭の焰が刹那、途切れる。

蒼白になった娘に構わず、かたり神は言葉を続ける。

「私は、お前の " はなしが聴きたい "、 " はなしを聴いて欲しい " という願いから生まれたもの」

娘は耳を塞ぎ、激しく首を振る。

「やめて！ そんな言葉聴きたくない！」

娘は必死に、かたり神の言葉を聴くまいと声を張り上げる。

「私は孤独なお前の慰みの為だけに生まれたヒトガタ。」

そして、」

「私が語り聞かせたのも、お前が紡いだ物語ですよ」

娘が悲鳴をあげるや否や、蠟燭の焰がかき消された。

かたり神は、最後の物語を語りはじめた。

〈ため息をついて、彼女は言う。「全ての物語の終わりは‘死’なんだ。死なない生き物はいないんだから」言葉は、部屋の中にぽつりと留まって、消えていった。静寂が埋め尽くす部屋の中で、僕は物語の終焉を知る〉

かたり神は娘の背中を軽くはたいて言う。

「さあさ、夜が明けました。物語はおしまいです。

……さようなら」

娘は、のろのろと顔をあげて立ち上がる。

部屋が明るくなるにつれて、かたり神の姿は透けていく。見る間に影もかたちも無くなってしまった。

暗闇に慣れてしまった目に朝日が眩しかった。

こちらの方でははじめまして、魚住すくもとうします。

本書は、ペーパーで本格的な電子書籍が作れると聞いて、興味を持って作ってみたいわば試作版のようなものです。

本をつくるにはある程度まとまった分量のテキストがいるということで、Twitterで書き溜めた小説を使おうと決めました。

でもただ載せただけじゃ、面白くないかなーと思い、粹物語形式にしてみました。

Twitter小説の選択や順番なども、物語の筋に沿って並べています。

長い物語をつくるのは、大変な作業です。わたしにとって、Twitter小説は、長い物語の断片なんだと思います。

あの断片とこの断片を組み合わせたら.....また違った物語がつくられていく。

そういう風に物語が増殖させていくのが面白いです。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

拙い作品ですが、楽しんでいただけたら、幸いです。

2012年1月

魚住すくも

かたり神の夜

<http://p.booklog.jp/book/41169>

著者：魚住すくも

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uzumisukumo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41169>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/41169>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ